第二章　木簡出土の遺構

一　6ABX・6ABY区の遺構

この調査は平城宮南面にある朱雀門とその内方に接する地区九二アールを発掘し、朱雀門、その東西脇門、南面大垣築地のほか、柵、掘立柱列、溝などを検出した。

朱雀門（SB一八〇〇）は北半部を発掘し、後世の改変をうけていたが、門基壇の掘込地形、門の棟通りと北側柱通りの礎石下の根固め石を検出した。それによると推定基壇の大きさは東西約三二m、南北推定約一七mで、桁行五間、梁行二間の各柱間約五mの門が考えられる。脇門（SB一八〇一・一八〇二）はそれぞれ朱雀門の南北中軸線より約二四mはなれた対称な位置にあり、二本の掘立柱（柱間四・三m）の簡単なものである。これらの朱雀門・南面築地からは多量の藤原宮式瓦が発見された。

朱雀門の内方は広場で、門から北に通じるバラス敷の幅約二三mの道路が確認された。この道路の東西両側に溝各一条（SD一九〇〇・一八六〇）が南北に走っている。木簡は、この西側溝**SD一九〇〇**から発見された。この溝は二つの溝が重複しており、上層溝は朱雀門の手前三八mのところで西に折れ、門基壇部をさけて南流する。

下層溝は南に直進して朱雀門基壇によって断ち切られているので、朱雀門造営以前のものである。木簡はこの下層溝から発見された。朱雀門北方三五mのところに杭と小枝で堰が設けられ、その上流にあった溝底のくぼみから、曲物・糸巻・土器などと共に発見された。この溝は、平城京造営前の下ツ道の西側溝と考えられるもので、「過所符」木簡(**一九六**)、「五十戸家」銘墨書土器などの内容とあわせて、平城宮造営直前の下ツ道を含んだ周辺地域の状況を知り得る貴重な資料である。木簡は、過所符を含む総数九点で、このうち七点を収録した。

二　6ADF区の遺構

この調査は、平城宮西面の中門（佐伯門）と南門（玉手門）の中間地区で、西面大垣の内側に沿う細長い区域を発掘した。発掘調査の結果、西面大垣築地SA一六〇〇の内側には秋篠川の旧河道が北から南に延び、宮城造営時にこれを埋立てていることがわかった。しかし、その埋立は完全ではなく、旧河道は平城宮造営後も幅二〇～二五m、深さ一・一m前後の南北につらなるくぼみとしてその名残りをとどめていた。このくぼみを横切って、東西掘立柱柵SA一九七〇がつくられている。くぼみの最も深い個所には柵の柱間の一つをつらぬいて柵と直交する二条の杭列SX一九七五が残っていた。同様の施設SX一九八二がこれより北方一二mのところにもあった。SX一九八二のすぐ東には数十本の杭を方形にめぐらした性格不明の遺構があり、さらにその区画内には円形の土壙**SK一九七九**があった。木簡は、この土壙の堆積土中から出土した。一九点出土したが材の腐蝕甚しく、判読可能なものはわずかで、本報告書にはこのうち一〇点を収録した。内容的にはそのほとんどが釘に関したもの

である。木簡のほかに、金属利器のための木柄、鞴口、鉱滓などが出土している。

三　6AAO区の遺構

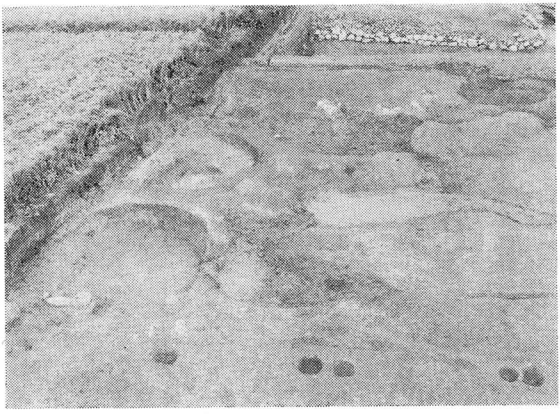
発掘区（6AAO区F・G地区）は通称一条通りの北側で、第二次内裏北外郭中央区と称している地域の東半部に当る。この東半部は、西半部に建物が多いのにくらべ、建物が少く、井戸SE二一二八があるほか空地の部分が多い。発掘区西南隅には、一〇個の土壙（SK二一〇〇～二一〇九）が密集しているが、木簡が出土したのは、その中のSK二一〇一・二一〇二・二一〇七の三個の土壙である。なお第二次内裏北外郭中央区は、市庭古墳の前方部周濠にあたっており、これらの土壙を含めて遺構の多くは、周濠を埋めたてた整地土上にある（近刊平城宮報告Ⅶ）。

SK二一〇一土壙　土壙SK二一〇一は、塵芥処理のための土壙であって、内裏北外郭南辺築地SA四八八の北方一・四mにある。大きさは、東西三・五m、南北三・四m、深さ九〇cmで、平面はほぼ正方形である。埋土は、細分すれば七層にわかれるが、大きく上・下二層にわけられ、前後二回の塵芥投棄・埋めたてが行なわれたと考えられる。すなわち、初め土器・瓦・木簡・木製品などを投棄してその上を灰色砂質土・木炭でおおい、その後その上にできたくぼみを利用して土器を投棄し埋めたてたらしい。二回の投棄は、上・下層に包含される土器の間に顕著な相違が認められないことから、あまり時間差がなかったと考えられる。この土壙は、層位的にみて、土壙SK二一〇二、築地SA四八八などより新しい。

木簡は、下層の最下部の暗褐色土層からかなり多量の土器・瓦とともに出土している。出土総点数は三九四（本報告書収録点数一一一、以下括弧内同じ）点で、そのうち約七〇％が削屑である。

次にこの土壙の埋没年代について考える。出土木簡中年紀のあるものは、天平一八年九月の調塩荷札（一九五三）、天平勝宝二年の貢進物荷札（一九五〇）、「勝宝」とある削屑（一九九八）の三点で、天平末から天平勝宝にかけてのものが集っていることが注目される。このことからただちに埋没年代を決定することはできないが、この土壙の出土土器と土壙ＳＫ八二〇出土土器との類同性は、埋没年代決定の手がかりを与えてくれる。

土壙ＳＫ八二〇は、ＳＫ二一〇一の東北方七二ｍ、第二次内裏北外郭東区に検出した塵芥処理用の土壙であって、その埋没年代は、六三点に及ぶ多量の年紀のある木簡の検討から、天平一九年からそれほど降らない時期と推測されている（解説一）。ＳＫ八二〇出土土器は、平城宮の土器を六段階に大別した場合、その第三段階に属しており、「平城宮Ⅲ」と仮称しているもので、ＳＫ二一〇一出土土器も、ややＳＫ八二〇のより新しい要素をもっているが、同じく「平城宮Ⅲ」に属するものと考えられている（平城宮報告Ⅶ）。以上の両土壙出土土器の類同性および出土木簡の年紀が近接していることか



第２図　木簡が出土した内裏北域の土壙群

ら、SK二一〇一の埋没年代は、SK八二〇のそれからあまりへだたらない天平勝宝年間に考えることができよう。土器以外の伴出遺物として、豊富な木製品が注目される。刀形・削り掛けなどの祭祀具、杓子・箸などの食膳具、曲物、木針、服飾用の留め針、火鑽臼、杵・くりかた・きり欠きの加工を施した小部材が出土している。

SK二一〇二土壙　SK二一〇一の東北方に、浅いくぼみ状の土壙SK二一〇〇（東西一六m、南北一四m、深さ二〇～三〇cm）があり、この土壙の中に、八個の土壙（SK二一〇二～二一〇九）が存している。土壙SK二一〇二は、東西三・八m、南北二・四m、深さ三〇cmの不整形の土壙であって、SK二一〇〇内の土壙の一つで、SK二一〇一の北方三mに存する。埋土は、大量の檜皮・木材片を包含した上層と、粘質土の下層とにわかれるが、一時に埋めたてられたものと考えられる。木簡は上層から一一一（三四）点出土している。

次に、土壙の性格・埋没年代について考える。土壙の性格に関して注目すべきことは、この土壙から木材片を含んだ檜皮が多量に出土したこと、出土木簡中に木材や扉金具の進上に関する文書（二〇四四・二〇八二・二〇八三）があることである。これらの事実は、この土壙がこの地域の造営に伴なう塵芥処理に用いられた土壙であることを推測させる。埋没年代については、一応層位からSK二一〇一より古いと考えられるが、年紀のある木簡からもう少し狭く限定できる。出土木簡中年紀のあるものは、神亀五年の調海藻荷札（二〇八一）、神亀六年三月の扉金具の進上文書（二〇八三）、天平元年の調銭荷札（二〇四九・二〇八〇）の四点で、神亀五年～天平元年に集まっている。このうち神亀六年の扉金具の進上文書の存在は重要である。この木簡の示す神亀六年は、この地域で行なわれた造営の年代の一端を示すと考えられ、この土壙はその造営の塵芥処理の土壙であるから、その埋没年代は神亀六年（天平元年）をあま

り降らない時期に考えることができよう。

伴出遺物としては、瓦は、第二次内裏北外郭地区を代表するものの一つである、小型の軒瓦六三一三・六三一四―六六六六・六六八五型式の組み合わせのうち、六三一三、六六六六・六六八五-B型式が出土し、土器は、「平城宮Ⅱ」と称しているものが出土している（平城宮報告Ⅶ）。この土壙の埋没年代は、各々の瓦・土器の編年上の絶対年代決定の手がかりを与えている。木製品は、槽、枘・くりかたの加工を施した小部材が出土している。

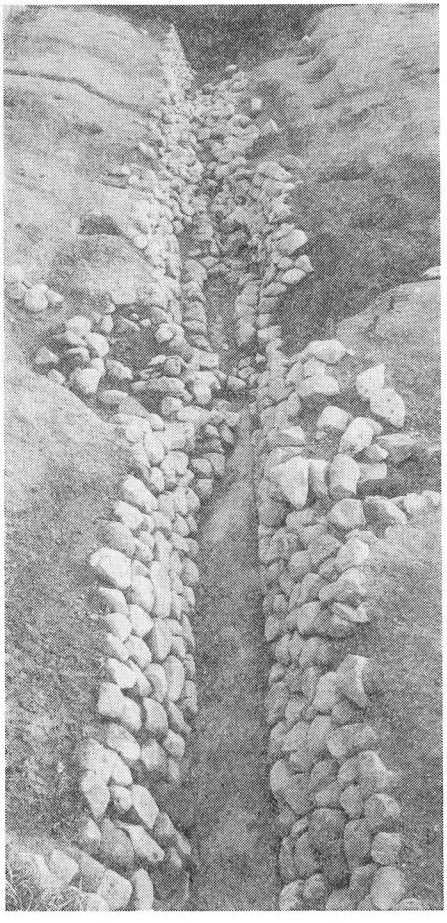
ＳＫ二一〇七土壙　ＳＫ二一〇七は、東西三ｍ、南北二・一ｍ、深さ三〇㎝のほぼ方形の浅い土壙で、ＳＫ二一〇一の東北方、築地ＳＡ四八八の北方一二・五ｍにある。ＳＫ二一〇二と同じく、ＳＫ二一〇〇内に掘られている。埋土は、檜皮を多量に含んだ上・下層と、それらの間に挟まれた砂混り粘土層の三層にわかれるが、一時に埋めたてられたものと考えられる。多量の檜皮が投棄されていることから、ＳＫ二一〇二と同性格の土壙と考えられるが、埋没年代は明らかでない。木簡は下層から出土し、出土総点数は一七（六）点である。

四　6ＡＡＣ区（Ｈ地区）の遺構

発掘区は通称一条通りの南側で、第二次内裏東面築地回廊の東側から宮城東張り出し部分の西端に至る間にあたる。この調査では内裏外郭を限る掘立柱回廊、その内側の建物群、発掘区の北辺には西側を柵及び築地で仕切った東西に走る宮内道路がみつかったほか、道路の南には柵で囲まれた某官署の一群の建物を検出した。内裏の外郭回廊から東二二ｍの位置に、玉石積の大きな南北溝が検出されたが、木簡はＳＤ二〇〇〇溝から出土した二

点のほかはいずれもこの大溝（SD二七〇〇）から出土した(年報一九六五)。

SD二七〇〇溝　この溝は縁幅二・六m、底幅〇・七m、深さ一・五mの規模をもち、側壁は直径三〇cm内外の玉石を七段に積み上げて築いている。昭和三年と昭和七年に、奈良県技師岸熊吉氏が一条通りの北側で調査した溝につながり、宮域東部における基幹の排水溝である(「平城宮遺構及遺物の調査報告」『奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第十二冊』)。今回は全長三五mを調査した。溝の埋土は、層をなしているが、その上下関係は、出土した年紀のある木簡によって、ほぼ堆積の順序を示すことが知られた。



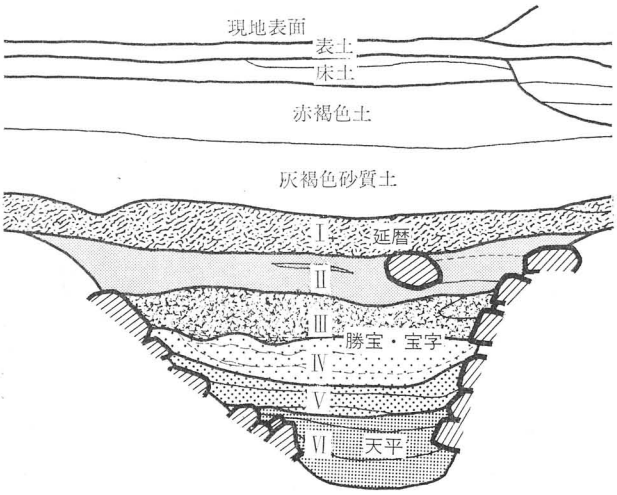
第3図　発掘された東大溝

木簡の総数は二九〇（一三九）点であるが、比較的削屑は少ない。完形品が文書木簡に少なく、付札に多いのは他の場合と同様である。内容的には、木工寮（二〇九七）、宮内省（二〇九四・二〇九六・二一六二）、典膳（二一四〇）、

6AAC区（H地区）の遺構

層　　位	木　　簡
Ⅰ〔黒土A〕	2105，2119（延暦２），2177，2209（延暦元）
Ⅱ〔砂　A〕	「宮内天長節」銘土器
Ⅲ〔黒土B〕	2099，2108，2109，2113，2120，2121，2122，2125，2131，2143，2144，2147，2165，2176（宝字5ヵ），2180（勝宝２），2181（宝字４），2184，2187，2188，2190，2191，2195，2197，2201，2202，2203，2204（５年），2206，2207（５年），2208（５年），2211（宝字），2213，2215，2217，2221
Ⅳ〔砂　B_1〕	2102，2104，2123，2124，2137，2182，2183，2185，2186，2189（天平末），2192（宝字４），2193，2194（宝字），2210（宝字５），2212，2218，2219，2233
Ⅴ〔砂　B_2〕	2094，2096，2097，2146，2157，2162，2163，2174，2179，2196，2199，2205，2216，2224（勝宝７）　「大炊」銘土器
Ⅵ〔砂　C〕	2110，2158，2178（天平元），2198（天平２），2200

第３表　東大溝層位別出土主要木簡一覧



第４図　東大溝北壁土層図

竪子所（二〇九九）など宮内関係の名辞の比較的多いことが注意される。岸熊吉氏による調査の際も、「内掃」「□

内省」「膳」などと記した墨書土器が発見されており、内裏外郭の東側という位置関係とも併せて、この附近の官衙の性格を考える上に一つの資料となろう。木簡以外の遺物としては、和銅開珎・万年通宝・神功開宝、「宮内天長節」、「□(宮ヵ)内省」、「□大炊」等の墨書をもつ土器、数点の施釉陶器、陶硯、土馬、木製容器、檜扇、箸などがある。墨書土器の出土層位は、前掲の第3表にあわせて示した。

なお、SD二七〇〇には、西の内裏内郭から築地下をくぐって流れこむ凝灰岩切石積みの暗渠**SD二〇〇〇**がある。この溝がSD二七〇〇に注ぎ込む手前付近からも木簡が二(一)点出土している(三二六)。

五　6AAC区(V地区)の遺構

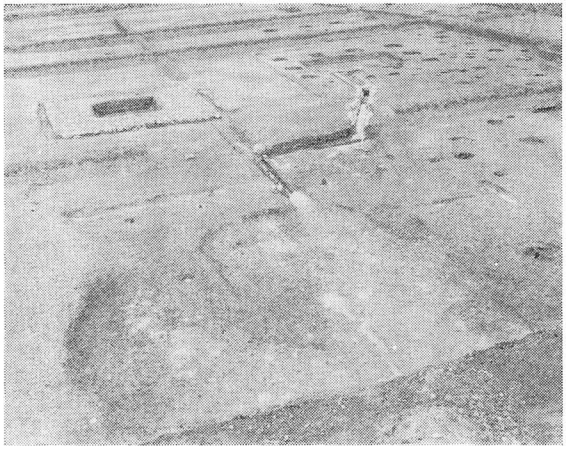
この地区は第二一次6AAC区B・D・H・I・N地区の東に接しており、平城宮東面北門外側の東一坊大路道路敷上という想定のもとに発掘を行なったが、道路は存在せず、のちの調査で宮域は東面大垣予想地点より東にさらに二五〇m広がっていることが判明した(年報一九六五・六七・六八)。

検出した遺構や、木簡その他の遺物から、この地区に宮内省に属する造酒司の存在を推定する根拠を得ることができた。以下木簡出土の遺構ごとに解説を加える。

SE三〇四六井戸　発掘区のほぼ中央で、覆屋を持つ二基の井戸を発見した。西のSE三〇四九は一辺三mの方形の井戸で周囲をバラス敷とし、その外に溝をめぐらし、東南隅から南に排水溝SD三〇五〇が延びている。東のSE三〇四六井戸は東西五・一五m、南北三mの長方形で、建物で密閉されており、湧水は南西隅にとり

つけた暗渠の木樋にあふれ出るようになっているので泉屋と称すべきものである。井戸の堆積土中には曲物・箸・箆・人形などの木製品を多数含み、瓦や土器も若干含んでいた。その堆積土の東南隅部分より木簡二点が出土した。また井戸底に敷いたバラス中より一点出土した。このうち井戸の堆積土から出土した二点を収録した。

ＳＤ三〇四七溝　ＳＥ三〇四六の排水溝ＳＤ三〇四七は木樋の暗渠から先が玉石溝の開渠になり、さらに側板を施した溝になって南西にのび、西井戸の排水溝ＳＤ三〇五〇に合流する。この玉石溝堆積土上層には大型の須恵器片や曲物・箸などの木製品や木片が多数含まれており、その中から木簡が一点出土したが、判読困難のため収録しなかった。これらの井戸および排水路は同じ場所で何度か改修をうけている。



第５図　造酒司木簡が出土した溝

ＳＤ三〇五〇溝　東井戸の排水溝ＳＤ三〇四七を併せた西井戸の排水溝ＳＤ三〇五〇は、東西柵ＳＡ三〇二三附近で素掘りの溝になり、さらに南流して発掘区の外へ続く。この溝は幅約八〇cmで、上層・下層の二時期に分れる。木簡は上・下の両溝から一六点出土し、このうち一二点を収録した。上層溝は、砂層とその下の瓦・土器を含むバラス混り褐色土層、それに黒色腐植土層からなっており、柵ＳＡ三〇二三から南でたまり状に

三〇cmほどの深さで浅く広がっている。

砂層からは宝亀元年銘の木簡(二三八)など二点、「酒司」、「造酒」などの墨書のある土師器杯片、箸などの木製品が出土している。バラス混り褐色土層からは、篦・箸・曲物・墨画唐草模様のある曲物蓋などとともに木簡が一〇点、その下の黒色腐植土層からは、やはり木片とともに天平四年の能登国(二三七)の木簡など二点が出土している。

下層溝は幅約五〇cm、堆積土は黒色粘土で、途中古いピット二つを切って南流している。そこから曲物・箸・板・棒などとともに木簡二点が出土した。以上のことから二基の井戸は奈良時代前半に既に存在し、たびたびの改修を経ながら少くとも宝亀元年にもまだ使用されていたことが知られる。

ＳＤ三〇三五溝　溝ＳＤ三〇五〇の西方約四ｍを距てであり、南方にのびる溝の一端と考えているが、あるいは土壙の一部である可能性もある。この発掘区でいちばん多量に木簡が出土した個所である。

溝は東西柵ＳＡ三〇二三の南から始っており、深さは約二〇cm、溝幅は約七〇cmである。当初は発掘区の南端まで続いていたようであるが、この溝が出来てからあまり間をおかず溢れ出て、たまり状に広がったと思われ、現状では溝の北端から八ｍ余り南のところで土壙状になり、南端幅は約四・五ｍになっている。このたまりの西よりの個所にもとの南北溝の部分が、幅五〇cm、深さ一五cmで溝状になって残っている。またこの溝に沿った東側には芝垣様のものが南北に続いている。

溝の堆積土は四層からなる。第一層は檜皮やハツリ屑・曲物・箸などを含む黒色砂層。第二層は暗褐色砂層で、曲物や大型須恵器片を含んでいる。ただしこの層は部分的にない個所がある。第三層は曲物・籠・篦・箸・檜

皮・ハツリ屑などの木片を多量に含む有機質黒色土層。第四層は土器を多く含み、まれに木片を含む溝底の流砂層である。この層からは曲物や箸などの他に、檜扇・人形・騎馬像のレリーフのある厚板などが出土している。また第三層と第四層とからは「酢」、「酒」などと記した墨書土器が五点出ており、木簡の記載内容とも見合っており、この地区に造酒司の存在を推定する資料になる。

たまりの中の溝状の場所では底の流砂層の部分が約二〇cmと厚くなっており、また南端では第二層目の砂層が厚くなり、遺物を含むようになる。木簡は堆積土全体から出ているが、第三層と第四層から多く出土し、とくに第四層からはこの発掘区で最古の霊亀銘の木簡が三点（三八七・三八八・三九四）出土しており、このSD三〇三五が、東のSD三〇五〇より以前から存在していたことを示している。

最上層の黒色土層からは天平勝宝八歳の木簡（三四七）が出ており、この溝出土の木簡の一番新しい年紀である。他の木簡の年紀をみても、だいたい土層の順に従って出土しているが、概して奈良の前半の年紀が多く見られる。以上のことからSD三〇五〇が奈良末まで存続していたのに対し、SD三〇三五はそれ以前に埋没してしまっていたのであろう。出土木簡の点数は五六二点で、このうち三〇三点を収録した。

六　6AAE・6AAF区の遺構

発掘区（6AAE区C・L・R地区、6AAF区A・B・J・K・L・N・O・P・R地区）は、東張り出し部と称する地域の西辺部分に当る。当初この地域は、宮城東面大垣の中門の外側で、東一坊大路と一条南大路とが交わる地

点と考えていたが、第三九・第四四次調査で東張り出し部の存在を確認したことによって、この地域が宮城内に入ることが明らかとなった(年報一九六七・六八・六五)。

出土木簡の総数は五一八(二九七)点で、削屑は比較的少い。内容的には、縫殿(二五九八・二六九八・二七三・二七三)、酒殿(二六三三)、大蔵省掌(二六七七)、宮舎人(二七一九)とあるものが注目される。特に縫殿に関するものは、点数も多く、関連すると考えられる女孺に関するもの(二七七七・二七九八)、衣服に関するもの(二七九九・二八二九)などがあり、この地域の性格を考えるための一資料となろう。木簡の出土した遺構は、発掘区全体にわたって散在し、またその種類も複雑多様なので、ここでは発掘区を大きく五つにわけて記述することとする(第六図参照)。

I　SD三四一〇溝とその付近

SD三四一〇溝　発掘区西辺に検出した南北溝である。最初素掘りであったが、のちに西壁を玉石積あるいは杭列で護岸している。幅三m、深さ一・五mで、本発掘区では七三mを検出しているが、第二九次・第三二次調査で、その南延長部と南端部を検出し、現在のところ延長五五〇mにおよぶことを確認している。また第三二次調査では、この溝が宮域東南隅で、宮城南面大垣の外堀と考えられるSD一二五〇に合流することを確認している(年報一九六六・六七)。堆積土の層位は部分的に多少異なるが、ほぼ三層にわけることができる。上層は暗褐色砂質土で、東壁をこえて五m近く東へひろがっている。中層は茶褐色砂質土で部分的に黒色粘質土を含んでいる。以上の二層は北半部分で瓦の出土が顕著であったほかは出土遺物の量が少ない。下層はバラスをまじえた暗茶褐色粘質土

で、木簡はこの下層から、土器片などとともに六五（三〇）点出土している。またこの溝の南端近くの東岸の褐色含礫土からも木簡一（〇）点が出土している。

SD三四一四溝　SD三四一〇の南端付近に、西から流れこむ東西溝である。木樋で暗渠になっており、東西四mを検出している。木簡は一（一）点出土している。

II　SD三二三六溝とその付近

SD三二三六溝　SD三四一〇から東方一七mにある素掘りの南北溝で、七二mを検出している。二回の改修が行なわれており、三時期がある。最も古い溝は幅二m、堆積土は土器を含んだ暗灰色粘質土層、次に古い溝は幅二m、両岸に杭をうち、堆積土はバラス混り暗褐色土層・粗砂層の二層で、両層とも土器・瓦片を包含する。最も新しい溝は幅一・二m、堆積土は土器・瓦片を含む粗砂層である。これら各時期の堆積土から出土した遺物の間には顕著な時代差はみられない。木簡は、これら各時期の堆積土から三三（一六）点出土している。

またこの溝の底にはいくつかの柱穴を検出しているが、ほぼ中央部に検出した柱掘方内から、縫殿に関する文書木簡など三（二）点が出土している（三五六・三五九）。

SA三二三七柵　SD三二三六溝の西方二・六mにある南北柵である。二三間分の柱穴を検出した。柱掘方はやや不揃いだが、長径または長辺一・六～二m、深さ〇・六～一mの楕円形または長方形の掘方で、大部分の掘方で柱痕跡を検出している。層位的にみて、この柵はSD三二三六の最も新しい溝よりは古いが、二番目に新し

い溝とは同時存在の可能性がある。木簡は南から二番目の柱掘方の埋土から五二（一三）点出土している。

ＳＫ三二三九・三二四一土壙　ＳＤ三二三六の南寄りの西岸にある土壙である。ＳＫ三二三九は、径七〇㎝、深さ二〇㎝の円形の土壙で木簡は一（〇）点、ＳＫ三二四一は一辺五〇㎝、深さ二〇㎝の方形の土壙で、木簡は一（一）点出土している。

Ⅲ　ＳＤ三二九七溝

ＳＤ三二三六の東方二三ｍにある南北溝である。二時期があり、新しい溝は幅一・二ｍ、深さ二〇㎝で、部分的に側壁に玉石積がのこっており、側壁を玉石積にしていたと考えられる。堆積土は砂層（上層）、粘質土層（下層）の二層である。古い溝は、新しい溝よりやや幅が広く、西壁が新しい溝より西方へ浅く広がっている。堆積土は砂層である。木簡は新古両溝の各層から三三（一九）点出土している。伴出遺物としては新しい溝の砂層から出土した神功開宝一点が注目される。

また溝の西岸で、溝をおおうバラス層から木簡一（〇）点が出土している。

Ⅳ　ＳＤ三二三六溝とＳＤ三二九七溝の間の地域

この地域は東一坊大路の路面敷と考えていた地域であるが、調査の結果、北寄りにＳＢ三三二二掘立柱建物、中央にＳＢ三二八八掘立柱建物、南寄りにＳＥ三二三〇井戸とその付属溝など多くの遺構を検出した。

SB三三二二建物　この地域の北寄りに検出した、七間×五間の東西棟掘立柱建物である。本発掘区で検出した最大の建物で、四面廂と北側に孫廂がついている。この建物と南方の五間×三間のSB三二八八は、両側のSD三二三六溝とSD三二九七溝の中間に正しく位置しているから、両溝が存続していた時期に造営されたと考えられる。木簡は、東妻の南から二番目の方形の柱掘方（一・三×一m、深さ四〇cm）の埋土の最上層にたまった褐色砂の中から、四五（三〇）点出土している。

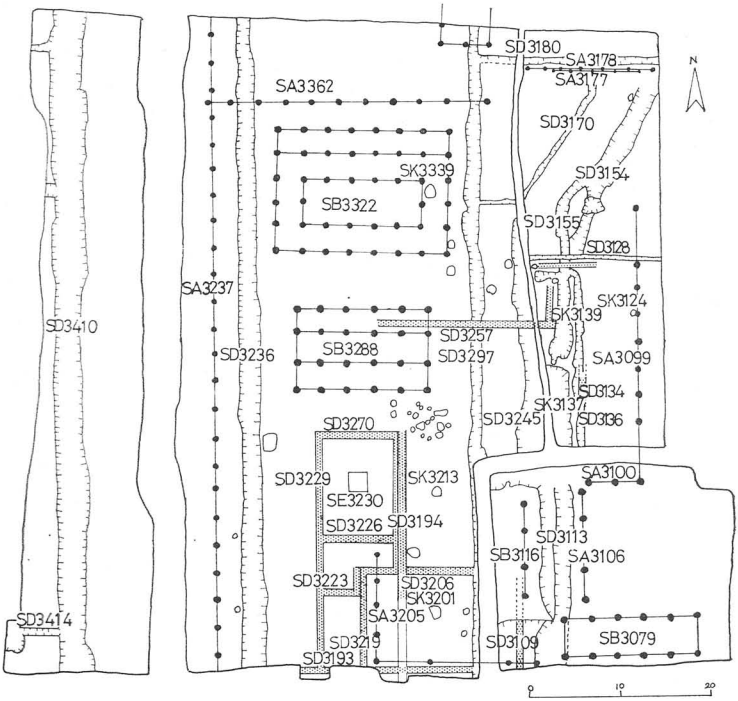
SA三三六二柵　SB三三二二の北方三mに検出した東西柵である。柱掘方は一辺一m、深さ四〇～五〇cmの方形で、一〇間分を検出した。木簡は東から第二・三・四番目の檜皮の充満した柱掘方内から、一四（一一）点出土している。

SK三三一〇土壙　一辺九〇cm、深さ三〇cmの方形の土壙で、SB三三二二の東妻南端の柱穴の南方一・二mにあり、木簡は五（二）点出土している。

SK三三二九土壙　径九〇cm、深さ四〇cmのほぼ円形の土壙で、SB三三二二の東妻南端の柱穴の北に接してあり、木簡は八（四）点出土している。

SK三三三九土壙　径一・五m、深さ三〇cmのほぼ円形の土壙で、SB三三二二の東廂内にあり、木簡は二〇（一〇）点出土している。伴出遺物として円座二枚がある。

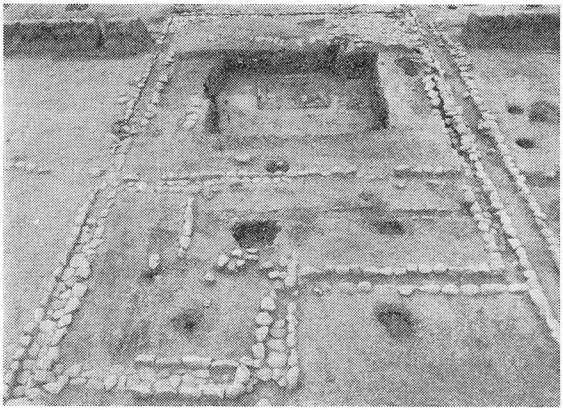
SE三二三〇井戸　この地域の南部中央に検出した一辺二mの方形の井戸である。掘方は一辺五mの方形で、井戸枠は井籠組となっており、最下段の枠材のみがのこっていた。井戸内には遺物がほとんどなく、木簡は掘方



第6図　6AAE・6AAF 区の木簡出土遺構略図

埋土最上層の砂層から一（一）点出土している。また井戸と同時期と考えられる**SX三二六九玉石敷**が、その周辺に部分的にのこっており、その玉石敷の間から木簡一（〇）点、その上層のバラス層から二（〇）点が出土している。

SD三一九四・三二〇六・三二一九・三二二九溝　SE三二三〇井戸の周囲には、素掘り、あるいは玉石を用いた溝を、縦横に交叉した状態で検出した。それらは前後三時期にわたり、底石・側石に改修を加えたり、また途中である部分を閉塞して流れを変えたりして、かなりの年限にわたって使用したものと考えられる。これらのうち、木簡が出土したのは、玉石溝SD三二二九・三二〇六・三一九四、



第7図　SE3230井戸と周辺の溝

素掘り溝SD三二一九である。

SD三二二九は井戸の西辺の南北玉石溝である。幅四〇㎝、深さ一〇㎝で、底・側石に径二〇～三〇㎝の玉石を使用している。北端で井戸の北辺の東西玉石溝SD三二七〇にL字状に接続し、南端で南辺の東西玉石溝SD三一九三にT字状に合流して、SD三二九七・三二二六に通じている。全長二五・六mあり、木簡は二(〇)点出土している。

SD三二〇六は井戸の南辺の東西玉石溝で、西端で、L字状に曲がるSD三二二三に接続してSD三二二九に通じ、東端はSD三二九七に通じている。全長一二mである。側石が遺存しているだけだが、SD三二二九と同じつくりと考えられる。のちにSD三二二三とSD三二九七との接続部分が玉石で閉塞されている。木簡は一(一)点出土している。

SD三二一九は、そのSD三二二三閉塞の後、SD三二〇六の水をうけるために掘られた素掘りの南北溝である。北端がSD三二〇六の西端に接続し、南端は発掘区域外で確認できなかったが、SD三一九三に合流するものと推定される。幅六〇㎝、深さ五㎝、全長一〇mあり、木簡は一(〇)点出土している。

ＳＤ三一九四は井戸の東辺にある玉石の南北溝で、玉石溝二時期が重複している。古い玉石溝は南端でＳＤ三二七〇にＬ字状に接続し、北端でＳＤ三二〇六にＴ字状に合流し、全長一四ｍある。この古い溝は、ＳＤ三二七〇・三二二九・三二二三・三二〇六と同様のつくりで、同時期と考えられ、これらの玉石溝が、ＳＥ三二三〇の周囲をとり囲み、ＳＤ三一九三・三二九七に合流していた一時期が考えられる。新しい溝は、古い溝の上にやや東にずれてある玉石溝である。溝のつくり・深さは古い溝と同じであるが、幅がやや広く六〇㎝ある。また古い溝と異なりＳＤ三二〇六より南方へのびており、全長一八ｍを確認している。新しい溝の底は、古い溝の底より一〇㎝ほど高いだけだが、ほかに対応する溝は検出できなかった。木簡は古い玉石溝から一（一）点出土している。

ＳＫ三一九五土壙　一辺六〇㎝、深さ二〇㎝の方形の土壙で、ＳＤ三二九七の西方八〇㎝、ＳＤ三二〇六の南方六ｍにある。埋土は、有機物を多く含んだ黒色砂質土で、瓦・土器片と共に四（一）点の木簡が出土している。

ＳＫ三一九六土壙　一辺七〇㎝、深さ二〇㎝の方形の土壙で、ＳＫ三一九五の北方一・八ｍにある。埋土はＳＫ三一九五と類似し、有機物を多く含んだ黒色砂質土で、若干の瓦・土器片と共に四（四）点の木簡が出土している。

ＳＫ三二〇一土壙　長径一・六ｍ、深さ五〇㎝のほぼ卵形の土壙で、ＳＫ三一九六の西方二・四ｍにある。埋土は、木質遺物を多く含んだ粘質土で、木簡は六（三）点出土している。「蟾蜍侍縫殿」の木簡（**三六九八**）が注目される。

SK三二一〇土壙　長径一・四m、深さ五〇cmの楕円形の土壙で、SD三二〇六の北方一m、SD三一九四の東に接する位置にある。木簡は三(一)点出土している。

SK三二一三土壙　一辺一・一m、深さ四〇cmの方形の土壙で、SD三一九四の東方三m、SD三二〇六の北方七・八mにある。埋土は有機物を多量に含んだ腐植土である。木簡は箸などの木製品とともに八(三)点出土している。和銅二年の年紀のある春糯の荷札(二七〇四)が注目される。

またSK三二一三付近には部分的に玉石敷がのこり、その上層のバラス層から、多量の有機質遺物と共に一一(七)点の木簡が出土している。神護景雲三年の年紀のある調の荷札(二七〇七)が注目される。

SK三二六四・三二六五・三二七一土壙　SD三二七〇とSD三一九四の接続点付近に散在する土壙群(径〇・四～一・六m)である。この中から人形・糸巻などの木製品とともに二七(六)点の木簡が出土している。天平勝宝七歳の年紀のある赤米貢進荷札(二七二四)が注目される。またSK三二七一のやや北方で、地山砂の上層の粘土層から木簡一(〇)点が出土している。

SA三二〇五柵　SD三二一九の東方一mにある南北柵である。SD三一九三の北岸にある東西柵SA三一一〇に接続する。四間分を検出し、柱掘方はかなり不揃いであるが、木簡の出土した北端の柱掘方は五五×六〇cm、深さ二五cmの方形の掘方である。木簡は、天平勝宝八歳八月の年紀のある宮舎人に関する文書木簡一(一)点が出土している。

SK三二八三土壙　一・五×二m、深さ三〇cmの方形の土壙で、SD三二七〇の西方延長上、SD三二三六の

東岸に接してある。中央に径四〇cmの柱痕跡があり、柱掘方かと思われるが、周囲にくみあう柱穴はなく、建築遺構としてまとまらない。木片・土器・瓦片とともに六(二)点の木簡が出土している。

V　SD三一九七以東の地域

SD三一八〇溝　この地域の北辺に検出した東西溝で、幅一m、深さ二〇～三〇cmで、全長一四mを確認している。底に径四〇cmほどの玉石が部分的にならんで残っており、玉石溝である可能性がある。木簡は一(〇)点出土している。

SA三一七七・三一七八柵　いずれもSD三一八〇の南岸にある東西柵である。両柵の柱穴はほとんど一線にならび、SA三一七七は四間分、SA三一七八は六間分の柱穴を検出している。柱掘方は両柵の間で変りがなく、一辺あるいは径七〇cm、深さ三〇～四〇cmの方形あるいは円形の掘方である。前後関係は不明だが、一方が他方のたてかえであると考えられる。木簡はSA三一七七の西端柱掘方埋土から一(〇)点、SA三一七八の東から第二・三・四番目の柱掘方埋土から四(四)点出土している。SA三一七八から出土した縫殿に関する文書木簡二点(二七三・二七四)が注目される。

SD三一五四・三一五五溝　SD三一五四は、この地域の東北隅から中央へ斜行する素掘り溝であり、SD三一五五は、北端でSD三一五四の西側に「く」字形にとりつき、南方へ流下する素掘り溝である。SD三一五五は、SD三一五四より新しく、SD三一五四をのちに途中でつけかえた溝と考えられる。SD三一五四は幅二・

〇～二・四m、深さ四〇cmで、堆積土は粗砂層（上層）、礫層（中層）、細砂層（下層）の三層である。ＳＤ三一五五は幅一・二m、深さ二〇cm、堆積土は砂層である。ＳＤ三一五四の溝内には、周囲を玉石溝にした径二mのくぼみがあり、水を溜めるようにしていたらしい。またＳＤ三一五五は、屈曲部の西壁に玉石積が残っており、特に水勢の強い屈曲部のみ玉石積で護岸していたと考えられる。ＳＤ三一五五の中央部は、その上部をのちに土器溜（ＳＫ三一三七・三一三九）として利用している。木簡は、ＳＤ三一五四からは三層すべてとくぼみから四一（二三）点出土し、上層から天平一九年一一月の年紀のある春米荷札（二七四九）、下層から郷里制にもとずく記載のある荷札（二七五三）、女孺に関するもの（二七五七）が出土している。ＳＤ三一五五からは、八（五）点出土している。

ＳＫ三一六九土壙　長径八〇cm、深さ二〇cmの楕円形の土壙で、ＳＤ三一五四の西岸にある。木簡一（〇）点が出土している。

ＳＤ三一五四付近の整地層　ＳＤ三一五四付近には、上層から暗褐色土層、暗灰色砂質土層、褐色砂層の三層の整地層がみられる。これらの層位は、部分的にやや異なるところもあり、暗褐色土層の一部が暗黒色粘質土層に変っていたり、暗褐色土層と暗灰色砂質土層との間に、木炭層がはさまっているところもある。ＳＤ三一五四は暗灰色砂質土層から掘りこまれており、これらの整地層との前後関係が知られる。木簡は整地層・木炭層の各層から出土している。暗褐色土層から一（一）点（二七六四）、暗黒色粘質土層から一（一）点（二七六五）、木炭層から天平宝字の年号のある荷札など九（八）点（二七六六～二七七三）、暗灰色砂質土層から二五（一九）点（二七七四～二七九二）、褐色砂層から一（一）点（二七九三）が出土している。

またSD三一五四から西方にややはなれたところで、暗灰色砂質土層の下層の砂層から一（一）点（二七五）、暗褐色灰層から一（一）点（二七六）の木簡が出土している。

SD三一七〇溝　SD三一五四の西方四mに検出した素掘りの溝である。東北から南西に斜行し、南端で西折してSD三二九七に合流する。幅六〇cm、深さ一〇cmで、全長二〇・四mを確認している。木簡は二（一）点出土している。

SD三一二八溝　幅三〇cm、深さ一〇cmの素掘りの東西溝で、この地域の中央部で検出した。全長一四mを確認し、西端四mは木樋となっている。埋土は暗黒色粘質土である。切り合い関係からみて、SD三一五五より新しい。木簡は一（一）点出土している。

SK三一五八土壙　長径七〇cm、深さ四〇cmの楕円形の土壙で、SD三一二八の西端の木樋の南方四〇cmのところで検出した。層位からみてSD三一二八より古い。木簡は女孺に関するもの一（一）点が出土している。

SD三二四五溝　SD三二九七の東方四・五mにある素掘りの南北溝である。東壁が畦畔下のため幅が確認できなかったが、最も広いところで二・六mあり、深さは三〇～四〇cmである。削平のため北で消えており、全長四五mを確認しているが、北へのびてSD三一七〇の屈曲部に合流する可能性がある。堆積土は、上層から灰色土層、黒色粘質土層、黄白色細砂層の三層で、木簡は、上・中層から土器・木片などとともに、八（六）点出土している。天平勝宝の年号のある調の荷札（二八〇）がある。

またこの溝の上層をおおう暗灰色土層から木簡一（〇）点、溝の南端の西岸の整地層下の砂層上面から、天平神

護の年号のある付札一（一）点（二八〇五）が出土している。

ＳＤ三二五七溝　ＳＤ三二九七に直交する東西溝である。側壁・底に玉石を用い、幅一ｍ、深さ一〇㎝、全長二〇ｍを確認している。堆積土は灰黒色砂混り粘土である。この溝は切り合い関係からみて、ＳＤ三二九七の新しい溝とは同時期の可能性があり、ＳＤ三二四五より古い。木簡は二（二）点出土している。

ＳＫ三三〇五土壙　ＳＤ三二九七の東岸に検出した円形の土壙（径九〇㎝、深さ三〇㎝）で、木簡は、藁製の円座とともに三（二）点出土している。

ＳＫ三三〇六土壙　ＳＤ三二四五の西岸に検出した方形の土壙（一辺一ｍ、深さ三五㎝）で、木簡は二（二）点出土している。

ＳＫ三一三七・三一三九土壙　この地域のほぼ中央部に南北に並んでいる、長い二個の土壙である。ＳＫ三一三九北土壙は、南北一〇ｍ、深さ一五～二四㎝、ＳＫ三一三七南土壙は、南北九ｍ、深さ二三～二七㎝で、幅は両土壙とも二ｍである。両土壙はＳＤ三一五五の上にあり、埋土は、ＳＫ三一三九が三層、ＳＫ三一三七が二層にわけられるが、両土壙とも、各層から瓦・土器・檜皮・木片などが多量に出土しており、ＳＤ三一五五の上部を利用した塵芥処理のための土壙と考えられる。木簡は、ＳＫ三一三九から天平宝字三年五月、景雲四年九月の年紀のある調荷札（二八一七・二八一九）など四（四）点、ＳＫ三一三七から五（五）点出土している。伴出遺物としては、多量の土器・瓦のほかに、ＳＫ三一三九から漆塗の棒、墨書土器各一点、ＳＫ三一三七から木製漆塗高杯・和銅開珎・神功開宝各一点が出土している。

ＳＫ三一四二土壙　一辺六〇cm、深さ三〇cmの方形の土壙で、ＳＫ三一三九の西方に接して検出した。木簡一（一）点が出土している。

ＳＤ三一三六溝　ＳＫ三一三九・三一三七の東方五〇cmに検出した素掘りの南北溝である。幅八〇cm、深さ一〇cmで、全長一九mを確認している。層位からみて、ＳＫ三一三九・三一三七より新しい。木簡は、一二（一二）点出土している。若狭国三方郡からの貢進物荷札四点（うち三点は能登郷の調塩荷札）がまとまって出土しているのが注目される（二八三～二八五）。

ＳＤ三一三四溝　ＳＤ三一三六の上に、やや東にずれて検出した玉石使用の南北溝である。幅八〇cmで、わずか全長一・八mが遺存していたにすぎない。側壁に径三〇cmほどの玉石を並べ、底に径一〇cmほどの小石を敷いている。木簡は調鉄荷札一（一）点（二八四）が出土している。

ＳＡ三〇九九柵　この地域の中央部東辺にある南北柵で、九個の柱穴を検出した。柱掘方は、一辺あるいは径一m、深さ四〇cmの方形あるいは円形の掘方である。木簡は北端の柱掘方埋土から五（四）点出土している。

ＳＫ三一二四土壙　ＳＡ三〇九九の北から四番目の柱穴と重複する方形の土壙である。七〇×六〇cm、深さ三〇cmで、埋土内には多量の瓦・木片・木炭・有機物を包含している。この土壙にはＳＡ三〇九九の柱穴など五個の柱穴・土壙が重複してほられていたが、切り合い関係からみてＳＫ三一二四が最も新しい。木簡は天平一九年一〇月の年紀のあるもの（二八九）など二（二）点が出土している。

ＳＢ三一一六門基壇下層堆積土　ＳＢ三一一六は、この地域の南部の西寄りに検出した門と考えられる礎石建

物である。南北にならぶ四個の礎石の根石と基壇を検出している。この基壇のたちわりの結果、基壇積土（厚さ三五㎝）直下の黒褐色堆積土層から二一（二）点の木簡が出土した。この黒褐色土層は瓦・土器片を包含し、後にのべるSD三一〇九溝の上をおおっている。

SD三一一三溝　SB三一一六の基壇の東にある素掘りの南北溝で、全長二〇mを検出した。二時期があり、上層の新しい溝は幅九〇㎝、深さ二〇㎝、堆積土は黄褐色砂質土で、SB三一一六にともなう溝と考えられる。下層の古い溝は、幅一・七m、深さ三〇㎝、堆積土は檜皮・木質物を多量に包含した暗茶褐色砂層（上層）、土器・瓦を包含した暗褐色含礫土層（下層）の二層である。この古い溝は、一部SB三一一六の基壇の下に入りこんでいるから、SB三一一六より古い。木簡は、古い溝から天平勝宝八歳一一月の年紀のある文書木簡一（一）点（二六四三）が出土している。

SD三一〇九溝　SD三二九七の東方三mに検出した南北溝である。幅八〇㎝、深さ三〇㎝、底は径三〇～四〇㎝の玉石を敷き、両壁は板をならべ、その内側に七〇㎝間隔で杭を打って押えている。堆積土は、土器・瓦片を包含する黒色砂質土である。SB三一一六の基壇の南で五mと、基壇のたちわりで西岸側板の一部を検出しており、延長一〇・八mを確認している。SB三一一六基壇積土の下から検出しているから、SB三一一六より古い。木簡は三（一）点出土している。

SA三一〇六柵　SD三一一三の東岸にある南北柵である。柱掘方はやや不揃いであるが、長径一・五m前後、深さ二五㎝の楕円形の掘方である。木簡は、北端と北から三番目の柱穴から三（三）点出土している。

能登	能登	八田		2280	○		
	能登	鹿島	天平宝字3	2817	○	加島	
越中	羽咋	都知		2195	○		能登国
丹波	桑田	川人		2272	○		
	氷上	井原		2255	○	刊本にはなし	
	何鹿	高津		2182	○		
丹後	与謝	宮津		2556	○		
	与社	謁叡		2256	○		
	竹野	鳥取		2205	○		
	竹野	芋野		2258	×		
	竹野	舟木		2257	×		
	熊野	田村		2259・2260	○		
但馬	養父	老左	天平勝宝7	2715	○	遠佐	
	七美	射添		2187	○		
伯耆	河村	笏賀		2748	○		
隠岐	周吉	奄可		2291	○		
播磨	明石	藤江(里)	天平19	2749	○	葛江	
	赤穂	大原		2261	○		
	佐用	柏原		2184	○		
	宍粟	柏野(里)		1955	○		
美作	勝田	塩湯		2186	○		
	勝田	豊国		2262	○		
備前	邑久	尾奴		2206～2208	○	尾沼	
	邑久	尾張		2752	○		
	赤坂	楢口		2078	×		
	児島	小豆		2177	×		
備後	御調	諫山(里)		2263	○		沼隈郡
紀伊	那賀	荒河		2266	○	荒川	
	海部	可太	神護景雲3	2707	○	賀太	
	安諦	英多	延暦元	2209	○		在田郡
	安諦	幡陁	天平宝字	2211	×		在田郡
	日高	財部	天平宝字5	2210	○		
淡路	三原	阿麻	天平宝字5	2176	○	阿万	
阿波	那賀	山代		2717	○		
	那賀	和射		2183	○		
讃岐	大内	入野		2816	○		
	三木	池辺		2590	○		

＊　〔　〕は「郷・里」を付してないもの。○は和名抄に郷名のみえるもの，×はみえないもの。なお高本は高山寺本，刊本は元和三年那波道円校刊の古活字版（『日本古典全集』）の和名抄をさす。

第4表　木簡にみえる郷名一覧

国	郡	郷	年	木簡番号	和	名	抄
大和	添	大野(里)		1928	×		
河内	志紀	少林		2278	×		
	志紀	田井		2277	○		
伊賀	安拝	服織		2267・2268	○	服部	
	伊賀	長田		2279	○		
伊勢	桑名	熊口		2276	○		
	鈴鹿	鈴鹿		2302	○		
	飯野	黒田		2289	○		
志摩	志摩	伊雑	養老2	2248	○		答志郡
	英虞	船越		2776	○		
尾張	中島	石作		2251	○		
	山田	山口		2254	○		
	智多	英比		2188・2189	○		
参河	飽臣	寸礼(里)	和銅2	2704	○	櫃礼(高本)・横礼(刊本)	碧海郡
	額田	新木	天平宝字4	2192	○	新城	
	渥美	幡太	天平宝字	2194	○		
伊豆	那賀	射鷲	天平勝宝8	2247	×		
安房	朝夷	健田	養老6	2246	○		
常陸	那賀	〔酒烈埼〕		2740	×		
近江	蒲生	阿伎(里)		1926	○	安吉	
	犬上	尼子		2216	○		
上野	緑野	小野		2781	○		
若狭	遠敷	遠敷		2201	○		
	遠敷	小丹生		2835	○	遠敷	
	遠敷	丹生(里)		1949	○		
	遠敷	佐分(里)	天平勝宝2	2591	○	佐文(高本) 佐分(刊本)	大飯郡
	遠敷	佐分		2592	○		
	遠敷	佐文	神護景雲4	2819	○		
	遠敷	木津	天平勝宝2	1950・2801	○		大飯郡
	遠敷	青		1948・2283	○	阿桑(刊本) 阿遠(高本)	大飯郡
	三方	能登		2818・2823・2824	○		
	三方	乃止		2822	○	能登	
	三方	竹田(里)		2665	×		
越前	足羽	野田		2774	○		
	坂井	荒墓		2190	○	荒泊	
	坂井	荒伯		2191	○	荒泊	
	江沼	忌浪		2076	○		加賀国